

第十五回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

木村 敏 著『木村敏著作集第七巻 臨床哲学論文集』

(2001年10月30日 弘文堂 刊)

木村 敏 きむら びん 昭和6年(1931)生まれ。外地生まれ。専攻は精神医学。京都大学医学部卒業。ミュンヘン大学神経科精神科に留学。河合文化教育研究所主任研究員(受賞時)。現在は京都大学名誉教授。著作は、『木村敏著作集』全八巻の他、“*Ecrits de psychopathologie phenomenologique*”、“*Zwischen Mensch und Mensch*”、“*L'Entre*”、訳書に、ビンスワンガー『精神分裂病』、ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』、他多数がある。

受賞のことば

このたび思いがけず和辻哲郎文化賞を頂戴することになりました。正式に哲学を学んだことのない臨床医の分際で、身にあまる光栄と思っております。

私が和辻哲郎に出逢ったのは、最初のドイツ留学で日本人とドイツ人の精神構造の違いに直面し、日本的な思索を精神医学に導入する必要性を痛感したことからでした。帰国後に読んだ和辻の著作に触発されて、「あいだ」という概念がわたしのキーワードとなりました。精神医学は科学としてはもちろん人類普遍のものであるはずですが、病んでいる人間の心を記述し思索する方法には、研究者の生まれ育った歴史的・文化的な伝統がかならず反映します。従来もっぱら西洋で築き上げられてきた精神医学に、日本人としてなんらかの寄与を果たすためには、その自覚がなによりも必要であると思います。その意味で今回の受賞は私にとって特に嬉しい出来事となりました。厚く御礼申し上げます。

植村 恒一郎 著『時間の本性』(2002年1月10日 勁草書房 刊)

植村 恒一郎 うえむら つねいちろう 昭和26年(1951)生まれ。東京都出身。専攻は、哲学。東京大学教養学部教養学科科学史・科学哲学分科卒業。同大学大学院哲学専攻博士課程単位取得退学。群馬県立女子大学教授(受賞時)。現在も同職。論文に「知覚の本性について」、「哲学が鏡の前で立ち止るときー鏡像の左右反転の謎」などがある。訳書にカント『視霊者の夢』、バークリ『視覚新論』、他がある。

受賞のことば

和辻哲郎文化賞は、私が哲学上の薫陶を受けた大森荘蔵の『時間と自我』も受賞しており、同じ賞を戴くことに大きな喜びを感じます。西田幾多郎、九鬼周造、和辻哲郎、大森荘蔵、廣松渉といった日本の哲学者たちは、西洋哲学の優れた思索の頂点と向き合いながら、それを我々自身の問題として引き受け、哲学するために努力を傾けてきました。その遺産のおかげで私も「時間」という大きなテーマに挑戦できました。私が本書で参考にしたのは、ウィトゲンシュタインの「治療的分析」という考え方です。西洋哲学は同次元の「対抗理論 counter theory」を作って問題を「解決」しようとする気風が強いのですが、むしろ我々自身が「一つの表示法にたまたま惹き付けられたりそれに反発を感じたりする」(ウィトゲンシュタイン『青色本』) 抜きがたい傾向をもっていることを自覚することが、囚われから自由になる一つの道ではないか。私はこのような線で考えてみました。

《選考委員評》

二つの世代の同時受賞を喜ぶ

湯浅 泰雄

学術部門では、今回は木村敏、植村恒一郎の両氏に授賞と決定しました。初めてのことで、

姫路市当局及び姫路文学館上田館長以下の各位に感謝申し上げます。

木村敏『臨床哲学論文集（著作集第七巻）』

精神医学者としての木村氏のお仕事は広く一般に知られているところで、著作集の他の巻には和辻哲郎の倫理学と関連の深い『人と人之間—精神病理学的日本論』のような有名な作品も入っている。選考委員会としては、そういう背景をも考慮に入れるのが望ましいと判断した。

精神の病いというのは極めて人間的な病気なので、その症状を理解することは、人間についての哲学的理解に深く結びつく必然性がある。近年は向精神薬の普及なども手伝って、精神医学の世界でも生物学的数量化的傾向は強くなっているが、それによって人間の精神についての理解が進むというものではない。木村氏が臨床哲学という名称を選ばれたのも、そういうところに理由がある。本書にはフッサール、ハイデガーその他から西田幾多郎など、東西の多くの哲学者の人間観に言及されている。収録された論文の多くは比較的最近のもので、西田の行為的直観論がとりあげられていることからわかるように、行為のアクチュアリティと生命に内在する目的という見方が強調されている。臨床の現場から患者の内面的体験に共感しつつ人間性の本質を考えるという著者の姿勢は、哲学にとっても、また思想の不在が目につきがちな近年の医科学の動向に対しても、深い示唆を与えるものであろう。

植村恒一郎『時間の本性』

時間についてどう考えるかという問題は、哲学にとっても科学にとっても重要な研究テーマであるが、この植村氏の作品は大変にユニークで、刺戟的な考察に富んでいる。数量としての時間という考え方を始めて説いたのはアリストテレスだとされるが、その意味を可能態と現実態というアリストテレスの概念に即して解明されているのにはみごとな感じを受けた。また現代まで数学者や論理学者を悩ませているゼノンのパラドックスについて、新しい視点からの考察がされていて興味深い。

時間のとらえ方としては、数量としての客観的時間の外に、過去、現在、未来という時間様相の問題がある。この問題はベルクソンやハイデガーなど現代の哲学者が主体的時間性という観点から取り上げたものである。私見では、この問題は時間と空間の統合性に関連しているようであるが、植村氏はここに「大地」という独特の概念を提案し、行為の観点から新しいアプローチを試みている。氏の恩師に当たる故大森荘蔵氏は時間論の著作で第五回和辻哲郎文化賞（一九九二年度）を受賞されているが、新しい世代の登場を喜ぶたい。

『木村敏著作集 7 臨床哲学論文集』

坂部 恵

木村敏氏は、三十年あまり前、西田哲学の「自覚」の概念を精神医学に導入し、いわばその欠如態として離人症の患者の世界・境地を読み解くお仕事で学界・思想界にデビューされた。それ以来、精神分裂病（現在の呼称は統合失調症）を病むひとびとの内面・外面世界は、氏にとって絶えることのない対話（とその途絶）の相手であり、氏の思索と探求を触発する「他者」でありつづけた。今回の授賞対象となった著作集の第7巻は「臨床哲学論文集」と題されているが、ひとりこの巻のみではなく、氏の思索の営為のすべてが、「臨床哲学」と呼ばれるにふさわしいゆえんである。

いまではほとんど想像もつかないことだが、木村氏が『自覚の精神病理』を世に問われた頃には、まだ戦時中の京都学派の国家イデオロギーへの加担の記憶がなまなましく、くわえて戦後に堰を切ったように流入した欧米の新しい思潮のあれこれの輝きも眩くて、西田や和辻の哲学は学界・論壇の片隅にうち忘れられたも同然の状態であった。そんな時、離人症の世界を西田で読み解いてみせる氏のお仕事は、わたくしども哲学の徒にとって何とも虚を衝かれたように新鮮に見えた。いってみれば異次元世界の探検から戻った旅行者が、見なれた楽器ではかな異郷の音楽をかなでてみせるような独特の強い印象をもたらしたのである。その後氏は、内外の多くの哲学・人文学の成果を旺盛に摂取しながら、みずからの臨床哲学

の思索を人間論、文化論をも包摂するところまで深めまた広げられ、ドイツ・フランスをはじめとする諸外国でも高い評価を得て今日にいたっている。今回の第7巻におさめられたここ十年ほどの一連のお仕事も、たえず新しい境地を開拓し未知の視界をひらこうとする氏のみずみずしい好奇心の健在ぶりを示してあまりがあり、今後の展開を期待させるに十分なものがある。

植村恒一郎『時間の本性』

人間はだれしも時間のなかで、あるいは時間とともに生きている。時間ほど日常茶飯の経験世界にあってわれわれに親しいものはないのだが、さて一体その時間の本性とは何かとあらためて考えてみるとたちまちいくつもの難関があらわれて容易に先へ進めなくなる。哲学の歴史をたどってみても、アキレスと亀で有名なゼノンのパラドックスからはじまって、さまざまな時間にかんする思索とその挫折が綿々と現代までつづいている。和辻哲郎文化賞の以前の受賞者である故大森荘蔵氏も、とりわけその晩年にはユニークでまた人間的味わいに富んだ時間論を展開されたが、その大森氏に教えを受けた今回の植村氏も師とはおのずから別な立脚点から初心にたちかえって綿密な時間を展開してみせる。

歴史上、アリストテレスに代表されるような「自然の時間」とアウグスティヌス流の内面的な「精神の時間」という二つの流れがあり、たがいに容易には折り合いのつかぬ様相を呈してきたのだが、植村氏はあえてこの二つをともに成り立たせるような解決の道を書きでさぐる。ベルクソンの「純粹持続」の考えにみられるように、ともすれば主観的相対的なものとのみ見なされがちな「精神の時間」にたいして、あえて「大地」という普遍的な基準を導入し、いわばそうした時間相互の翻訳可能性を確保するとともに、アリストテレスの運動論や時間論さらには知覚論を詳細に検討して、そこから「自然の時間」のあるべき位置を定めるのである。大地に根ざしながら、太陽や月の運行にしたがって暦を作り時間をはかる。悠久の天地の彼方に、目眩めくような相対と絶対のたわむれ、時間のたわむれが見えてくる。地味な小著ながら、中堅世代の哲学徒の健在ぶりを示す好著である。

『木村敏著作集7 臨床哲学論文集』

濱井 修

本書は、収録論文十八編のうち、はじめの三編の他は一九九二年から一九九九年にかけて発表された「臨床哲学」に関する論考から成っている。

著者によれば、臨床哲学とは、精神病理学において患者の語った個々の言表を当人の全般的な生き方や行動様式にはめ込んで、患者の「全体」を洞察する「実践の哲学」である。それは精神に関する客観的な真理を目指す「科学」であるよりは、むしろ生きた人間の「こころ」の治療学である。そこで著者の精神病理学は哲学的考察を欠かせない「人間の学」という性格を色濃く持つ。

かねてより著者は「人と人との間」について独自の哲学的考察を行って来たが、本書では人間の思考や行動は「生命のアクチュアリティ」に根付いているという視点のもとに、その考察を一層深化・発展させている。すなわち第一に、人と人との間にあるものは物理的空間のような「リアリティ」ではなく、「行為を通じてのみ開けるアクチュアリティ」であると考える。そして第二に、ヴァイツゼッカーが「生物＝生命論」において提唱した、「主体」とは有機体と環境との「相即」を維持する働きだとする見方を承け継いで、「自己」や個体、さらに共同体の「外部」に主体があると考え。こうした見地に立つとき、精神科学は「こころ」を計測可能な物質的過程に還元して科学的真理に安住する「ニヒリズム」に墮することなく、躍動するこころの「生成」の現場を捉えることができるという。

著者はフッサールの現象学をはじめ、内外の哲学的文献を自らの関心の赴くままに広範に渉猟しつつ論を進めているが、そのすべてが精神病理学者としての治療経験に裏打ちされている。名実ともに「臨床哲学」の領野を拓く偉大な業績である。

植村恒一郎『時間の本性』

本書は、古来哲学の主要トピックスの一つである「時間」について考察した論考である。著者によれば、時間の哲学が困難なのは、我々が時間に関する基本概念（「過去」「現在」「未来」など）の「自明性」に囚われていることによる。そこで著者は、この状況から自由になるための時間概念の「治療的分析」を試みる。

著者の見るところ、時間の理解には大きく分けて二つある。一方は、時計によって示される「量」としての時間であり、もう一方は過去・現在・未来という「時間様相」である。前者はアリストテレス的時間ないし「自然の時間」であり、後者はアウグスティヌス的時間ないし「精神の時間」である。哲学的時間論の根本問題は、本来一つのものであるはずの時間がこのように二つの時間に分裂し、両者の関係を統一的に捉えられないところにあると言う。

この問題を解くために、著者は時間様相を「過度に抽象化したまま扱う」ことなく、「運動」「変化」「生成・消滅」といった自然に関わる概念との結びつきに注目し、それらが精神の時間の根源であることを明らかにする。それは一口に言って、「我々自身が大地の上を歩くこと」を時間現象を考えるモデルにすることであり、これによって時間様相をたんに意識の働きとして捉えたベルクソンやフッサールの時間論の欠陥を克服し得るとする。この結論を導くため、著者は「現在の謎」をめぐる考察をはじめ、精細な分析と論証を積み重ねる。

本書は最近の英米分析系の議論をフォローしながらも、アリストテレスやカントによる古典的な時間論を再評価して、現代の哲学的時間論に新たな境位を拓いた気鋭の論考であり、コンパクトな体裁の中に高密度の論議を展開した優れた作品である。